CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by University of Toyama Repository

人間発達科学部紀要　第２巻第１号：167－178（２００７）

遊び能力が子どもの自立性に及ぼす影響についての研究

姜　信善・滝川　祐子*

The Effect Of Playing Ability for Independence in Elementary School Students

Sinsun KANG, Yuko TAKIKAWA*

キーワード：遊び，遊び能力，自立性，子ども
keywords：Play, Playing Ability, Independence, Elementary School Students

問題及び目的

遊びとは，「個人あるいは集団により，それ自体の楽しみや享受のために行われる活動」と定義されている（心理学小辞典, 1978）。

Kathy Hirsh-Pasek & Roberta Michnick Golinkoff & Diane Eyer（2006）によれば，遊びは知性の発達，創造力，問題解決能力の強固な基盤を提供し，また，情操の発達や基本的な社交能力の発達を促す手段にもなるとされている。すなわち，遊びは学びの場であり，多くの経験や人間関係を築くことができ，心身の発達のために重要であると考えられる。

子どもの遊びの研究は，大きく２つの観点から行われている。１つは，遊びそのものに関しての研究であり，遊び種類の分類及び昔と今の遊びを比較検討されているものである。具体的には子どもの実態に即し，遊び種類をカテゴリー化し，分類したものである（柿沼・芳野, 1986）。２つは，遊びによる子どもの発達への影響に関する研究であり，多様な人間関係の経験は，同じ遊び集団の中でも，特に活動的遊びを通して経験されることが示されている（横山, 2004）。また，金子・横田（1997）は，児童期に複数で遊んだ経験のある青年ほど，他者に愛着を持ち感情的に暖かく，人間関係を大切にすると述べている。森・植田・福井（1982）は子どもの遊び行動や態度を測る「遊び能力」尺度を作成し，検討したうえ，学校生活における対人関係能力（学級集団内における地位など）と遊び能力との関係を以下のように明らかにしている（森・植田・福井・西田, 1984）。

まず，遊び活動，学習活動，作業活動のいずれの場面においても遊び能力の低い子どもは，集団で高い地位を得ることは難しく，逆に遊び能力の高い子どもは集団で低い地位に位置することは少ないということであった。次に，遊び，学習，作業，それぞれの集団形成に遊び能力はどのように関わっているのかについて，その結果から特徴的なものをみてみると，まず，“遊んでいるとき，笑ったり，大きな声を出して楽しそうに遊ぶか”という「喜悦度」があげられる。これは，遊び集団の形成に強く影響するだけでなく，学年が進むにつれて，学習集団及び作業集団にも影響している。また，その影響力は学年が進むにつれて強くなり，高学年ではどのグループ形成においても，この「喜悦度」が仲間選択に当たって第１の条件となるようであった。同様に，遊び能力において，“遊びを楽しくしたり，上手くいくように友達に話しかけられたら受け答えするか”という「応答力」及び“みんなで遊び道具をそろえたり，できない友達に教えたり，手伝ってあげるなど，友達と助け合って遊ぶか”という「協力度」もいずれの集団形成においても大きな影響力を持つようであった。

さらに，森•植田•福井•西田（1985）は，学校生活態度を15の観点から評価し，遊び能力との関係を調べたところ，高い相関関係にあることを明らかにし，遊び能力は一般的な生活態度の形成にも深く関わっていると考えられた。具体的には生活態度尺度15項目のうち，次の５つの項目で遊び能力との間に相関関係が見られた。１“しっかりした自分の考えを持ち，意見を発表できる”，２“自分で計画をたて，進んで活動することができる”，３“自分の言動に責任を持ち，仕事を果たすことができる”，４“生活をより良くするために，新しい考えや方法を出すことができる”，５“誰とでも仲良くし，力を

*富山大学教育学部　学校心理学専攻　平成18年度卒業

かすことができる”であった。これらは，遊び能力として培われたものが発展したものと考えられた。すなわち，学校生活態度項目の１及び２は遊び能力の評価カテゴリーのうち，主に「理解力」や「能動性」と関わり，３は「役割遂行度」と，４は「創造的能力」，５は「協力度」と関連が深いと考えられた。

このように，仲間関係や学校生活を円滑にするために子どもの遊び能力は重要な役割を果たしていることが明らかである。

C.カミイ & R.デブリーズ（1984）によると，子どもはルールのあるゲームを通して，社会的，道徳的，認知的な面だけでなく，情緒的にも発達し，子どもの自律性（autonomy）の発達が促されるという。すなわち，集団ゲームには，ルールがあり，子どもたちがルールをつくり，それを実行し，修正していく過程で，子どもたちは自律的な能力を獲得していくと考えられる。宮川・山口（1994）によれば，子どもたちは，集団ゲームにおいて，自分と違う考えを持つ他者の存在に気づき，相互に関わりあって，自己中心的な視点から脱中心化することができるようになっていくという。そして，他者のことも考慮に入れながら，自分で考え，自分自身で判断し，自律的に行動できるようになっていくのであると考えられている。

これらの研究結果より，遊びは様々な経験を得られ，子どもの心身の発達のために重要であり，また，自立性を養っていくことができると解釈される。では，遊ぶ力である遊び能力は自立性と具体的にどのように関連しているのだろうか。

しかし，遊び能力が子どもの自立性に及ぼす影響についての研究はほとんど行われておらず，その関連は明らかにされていない。遊び能力そのものについても，上述の森ら（1982）において，「遊び能力」尺度が作成されたが，親や保育者の回答から尺度の項目作成を行っており，子どもの遊びの実態に即したものとは言い難い。

一方，自立性の先行研究は，小野（2004）の研究においてのような概念についての分析がほとんどであり，さらに，自立性を測定する尺度は大人のものが多く，子どもについての尺度はほとんど見当たらない。すなわち，遊び能力や自立性についての研究においては子どもからの回答により，項目収集を行ったうえで検討することが必要であろう。

これらの点をふまえた上で，本研究の全体的目的は，遊び能力と自立性との関連を明らかにすることである。具体的に，以下の内容を検討する。

1. 遊び能力が自立性に及ぼす影響について調べる。そのため，子どもを対象とした遊び能力及び自立性についての尺度の作成を試みる。
2. 1. で作成した尺度を用い，遊び能力が子どもの自立性と具体的にどのような関係があるかについて明らかにする。

Ⅰ．予備調査（研究1）

目的

本研究では，遊び能力が子どもの自立性に及ぼす影響について検討する。そこで予備調査では，子どもの実態に即した基本的遊び能力や仲間入り場面での対人交渉能力，自立性の測定項目を作成することを目的とする。

方法

まず，遊び能力に関しては，２つの観点から検討を行った。すなわち，１つめは，子どもの基本的な遊び能力についてであり，２つめは，遊びの中でトラブルや思いがけないことが起こったときの対処能力についてである。基本的遊び能力については，子どもが一般的に楽しく遊んだりするとき，友達と仲良く遊んだりするとき，どのようなことを考えているのかを自由記述による回答から検討を行なう。トラブルへの対処能力については，「遊びに入れてほしい」と言ってきた子がいたとき，どう思うのか（どうするのか）という仲間入り場面での交渉の仕方を自由記述による回答から検討を行なう。次に，自立性に関しては，子どもの日常生活において自分から進んですることはどのようなことがあるのかを自由記述による回答から検討を行なう。

1．対 象 者：T県の小学生220名（男104名，女116名）

2．調査時期：2006年７月中旬

3．調査内容：遊び能力・自立性については以下の内容が調べられた。

（1）遊び能力について

① 基本的遊び能力について

基本的遊び能力に関する項目を収集するため，次のような質問を行なった。友達と仲良く遊ぶためにどんなことを考えたり，実際にやったりしているのか，また，もっと遊びを楽しくするにはどうしたら

よいと思うのかの２項目について自由記述により回答が求められた。

②　仲間入り場面での対人交渉能力について

仲間入り場面での対人交渉能力に関する項目を収集するため，次のような質問を行った。「遊びに入れてほしい」と言ってきた子がいたとき，どう思うのかを自由記述により回答が得られた。尚，子どもの考えをより多く得て，項目作成の参考にするため，「どう思うのか」について質問した。つまり，「どうするのか」と言う聞き方では，「入れる」「入れない」といった単純な回答が予想される。そこで，理由や感情を伴うような複数の回答が予想される「どう思うか」について質問を行った。

（２）自立性について

自立性に関する項目を収集するため，次のような質問を行った。家や学校で，自分からやることはどんなことであるのかを自由記述により回答が求められた。

結果

予備調査の結果より，遊び能力及び自立性については，それぞれ次のように分類することができた。

１．遊び能力について

（1）測定内容項目について

①　基本的遊び能力の測定内容項目について

A）相手への気遣いや同調について

“自分の都合に合わせず，何をやりたいか聞く”“遊んでいるとき，相手がいつもと様子が違ったら聞いてみる”など，相手の気持ちを察し，気を配ったり，共感したりする内容の項目である。

B）遊びの工夫について

“自分で工夫して作った遊びをする”“遊びがおもしろくないと思ったときは新しいルールや遊び方を考え出す”など，遊びが楽しくなるように新しい遊びやルールを自分で考えて作り出す内容の項目とされた。

C）自分の気持ちや考えを伝えることについて

“何をして遊ぶか話し合うとき，自分の意見を言う”“言いたいことがあったら，心に隠しておかず，なるべく言うようにする”など，遊びをよりよくするために自分の気持ちや考えを相手に伝える内容の項目である。

D）遊びの手順や方法を考えることについて

“どこで何をするか考えてから遊ぶ”“しっかりルールを決め，もめないようにする”など，あらかじめ遊びの手順や方法を考え，遊びを円滑にしようとする内容の項目とされた。

E）公平に接し，規則を守ることについて

“ルールをしっかり守って公平にする”“遊ぶとき，自分のやりたいことと相手のやりたいことを交互にする”など，自分の都合や気持ちに偏らず，平等に扱い，規則を遵守する内容の項目である。

②　仲間入り場面での対人交渉能力の測定内容項目について

回答を分析した結果，仲間入り場面での対人交渉能力に関しては，「『遊びに入れて』と言ってきた子がいたとき，あなたはどう思いますか?」とたずね，その回答を，次のようなカテゴリーから分類することができた。すなわち，受諾・拒否の理由により「受諾」，「条件付受諾・拒否」及び「拒否」の３つに分けられた。「受諾」では，相手を思いやって入れるものと遊びが楽しくなりそうだから入れるもの，さらに，入れるとともに今の遊びの状況を相手に教えるものなどの内容であった。「条件付受諾・拒否」では，相手のことが嫌なら入れないものまたは自分達がやっている遊びによって入れるか入れないか決めるなどの内容であり，「拒否」では，入れないまたは入れないがその理由を相手に説明し，伝えるものなどであった。このような観点から，項目内容を修正し，分類を行った。その詳細は以下の通りである。

F）受諾

“かわいそうだから受け入れる”“仲間はずれにしたらいけないので入れる”など，相手の立場や気持ちを考え，受諾する内容の項目である。

G）状況による受諾・拒否

“悪い態度で言われたら入れない”“人数が足りていたら入れない”など，自分の都合や気持ち及び遊びの状況から仲間に入れるか，入れないかを決める内容の項目であった。

H）拒否

“周りの子と相談してダメなときは謝って今度にしてもらう”“遊びに入れない理由を相手が傷つかないように優しく説明する”など，断るときは相手のことを考え，説明を加える内容の項目とされた。

（2）遊び能力の測定項目の作成・検討

（1）で述べたように，基本的遊び能力については，A）～E）の５つのカテゴリーから，対人交渉能力では，F）～H）の３つのカテゴリーから分類し，それぞれ項目を作成した。これらの作成されたすべての

項目について，①項目内容のカテゴリーへの合致性，②カテゴリーの項目内容への合致性，③質問項目の言語表現の適性を検討し，問題点があると思われる項目については修正または削除を行なった。最終的に，基本的遊び能力では，5つのカテゴリーについて合計27項目を測定項目とされ，仲間入り場面での対人交渉能力では，3つのカテゴリーについて合計16項目を測定項目とされた。以下より，「仲間入り場面での対人交渉能力」を「対人交渉能力」と略する。

2．自立性について

（1）測定項目内容について

I）学校規律やルールについて

“係や委員会などの役割を自分で責任を持ってやる”“自分から元気よくあいさつする”など，学校生活での規律やルールを自分から守っていく内容の項目である。

J）学習場面について

“進んで宿題をやる”“授業に真剣に取り組む”など，学校や家での勉強や課題を自分から進んで行なう内容の項目とされた。

K）基本的な生活習慣について

“家族のために自分ができることを進んでする”“自分の身の回りは自分で整理整頓する”など，日常生活習慣を確立することや自己の管理を進んで行なうことなどについての内容の項目である。

L）自分が好きなことに積極的に取り組むことについて

“目標を持って，自分のしたいことをする”“自分が好きなことに活発に取り組む”など，自分の趣味や好きなことに積極的に取り組む内容の項目であった。

M）対人関係に対する積極性について

“よりよい関係を作るため，自分から友達に接していく”“友達のことを知るために自分から友達に話しかける”など，友達との関係をさらによりよくするために，自分から友達に接していく内容の項目とされた。

（2）自立性の測定項目の作成・検討

作成されたすべての項目について，①項目内容のカテゴリーへの合致性，②カテゴリーの項目内容への合致性，③質問項目の言語表現の適性を検討し，問題点があると思われた項目については修正または削除を行なった。上述のI）～N）の5つのカテゴリーについては合計25項目が作成され，これらを自立性の測定項目とされた。

Ⅱ．遊び能力及び自立性の尺度作成について（研究2）

目的

予備調査により，遊び能力及び自立性について測定項目内容が検討された。ここでは，遊び能力尺度及び自立性の尺度を作成することを目的とする。特に，本研究においては，遊び能力として基本的遊び能力及び対人交渉能力の2つの観点から尺度の作成を行う。

方法

1．対 象 者：T県の計7校小学生719名（男子359名，女子360名）

2．調査時期：2006年12月上旬

3．調査内容：予備調査によって収集された「遊び能力」及び「自立性」に関する項目についてそれぞれ，あてはまる～あてはまらないの5件法で回答を求めた。遊び能力及び自立性のいずれにおいても，その傾向があるほど高得点となるように得点化した。

4．分析手続き：遊び能力及び自立性に関する質問項目に対する回答を，あてはまる5点～あてはまらない1点とし，バリマックス回転による因子分析を行った。

結果

本研究では，子どもの遊び能力を基本的遊び能力及び対人交渉能力の2つの能力として分類し，質問項目の作成を行った。ここでは，それらの質問項目から，得られた回答についての因子分析を行う。以下より，その結果についてみていく。

まず，基本的遊び能力についての因子分析に関しては，固有値の減退状態などから，3因子を仮定することができた。因子負荷量が.30以下の項目，複数の因子に因子負荷量が高い項目を削除した後，残りの項目について，再度因子分析を行った。バリマックス回転後の因子構造をTable 1-1に示す。累積寄与率は36.8%であった。

第1因子は“ルールをしっかり守って公平に遊ぶ”“自分の都合に合わせず，友達に何をやりたいか聞く”などの項目からなり，「気遣い・公平」因

Table 1-1　基本的遊び能力に関する因子分析結果

No	項　目　内　容	気遣い・公平	創造性	自己表出	共通性
5	ルールをしっかり守って公平に遊ぶ。	.618	.083	.107	.401
11	自分の都合に合わせず，友達に何をやりたいか聞く。	.563	.133	.202	.376
27	相手がしてほしいことをなるべくやってあげる。	.537	.252	.214	.398
20	遊ぶとき，みんなが遊びに参加できるようにする。	.531	.284	.259	.429
25	遊ぶとき，相手のやりたいことと自分のやりたいことを交互にする。	.528	.295	.271	.439
10	遊ぶとき，ずるや卑怯なことはしない。	.514	.048	-.010	.267
24	遊べる時間や場所を考えて遊びを決める。	.509	.173	.197	.328
1	危険がないように，遊具や物を安全に使って遊ぶ。	.492	.036	.050	.256
7	自分で工夫して作ったほかにないような新しい遊びをする。	.091	.713	.147	.539
17	遊んでいるとき，自分たちが楽しめるようにルールを作り変える。	.205	.643	.309	.550
22	学校や家にあるいろいろなものを遊びに使えないか，考えたり，試したりする。	.205	.619	.168	.453
2	遊びに楽しいルールを付け加える。	.138	.528	.286	.379
21	友達を笑わせたり，自分から遊びを盛り上げる。	.185	.468	.270	.326
3	何をして遊ぶか話し合うとき、自分の意見を言う。	.141	.333	.620	.515
8	遊ぶとき，自分が知っている遊びを提案する。	.188	.339	.529	.430
18	遊ぶとき，言いたいことがあったら，心に隠しておかず，なるべく言うようにする。	.166	.309	.519	.392
	因子寄与	8.073	1.404	.409	
	因子寄与率（累積寄与率）	29.9	5.2(35.1)	1.7(36.8)	
	α係数	.802	.797	.714	

Table 1-2　対人交渉能力に関する因子分析結果

No	項　目　内　容	思いやり受諾	条件付受諾・拒否	説明をともなった拒否	共通性
13	入れなかったら，自分も相手も嫌な気持ちになるから入れる。	.728	.242	.170	.479
7	仲間はずれにしたらいけないので入れる。	.667	.201	.325	.496
1	かわいそうだから入れてあげる。	.577	.105	.255	.363
10	自分が入れなかったら，嫌だから入れる。	.535	-.027	.114	.248
4	差別をしないで入れてあげる。	.529	.334	.200	.375
8	自分が嫌いな子なら入れない。	.151	.666	.084	.376
11	遊びがつまらなくなりそうなら，入れない。	.156	.613	.043	.337
14	やっている遊びによって，入れるか入れないか決める。	.053	.550	-.125	.244
16	人数が足りていたら入れない。	.201	.499	.003	.268
2	悪い態度で言われたら，入れない。	.079	.493	.025	.216
5	遊んでいる子とその子が仲がいいのであれば入れる。	-.069	.354	-.208	.149
6	遊びに入れない理由を相手が傷つかないように優しく説明する。	.201	.036	.705	.427
9	断るときは，相手の気持ちも考え，入れない理由を相手に分かりやすく伝える。	.216	.093	.648	.402
15	人数が多すぎるときは「ごめんね」をきちんと言い，今度誘うことを伝える。	.243	-.084	.560	.311
12	一緒に遊んでいる子が嫌だといったら，相手に今度一緒に遊ぼうという。	.136	-.049	.378	.146
3	まわりの子と相談してだめなときは，謝って今度にしてもらう。	.007	-.326	.373	.204
	因子寄与	3.510	1.950	.600	
	因子寄与率（累積寄与率）	21.9	12.2(34.1)	3.7(37.8)	
	α係数	.794	.701	.682	

子とした。第２因子は“遊びに新しいルールを付け加える”“友達を笑わせたり，自分から遊びを盛り上げる”などの項目とし，「創造性」因子とされた。第３因子は“何をして遊ぶか話し合うとき，自分の意見を言う”“遊ぶとき，自分が知っている遊びを提案する”などの項目からなり，「自己表出」因子とした。また，α係数を算出したところ第１因子，第２因子，第３因子，順に，α＝0.80，0.80，0.71であった。本研究においてはこれを基本的遊び能力とみなし，基本的遊び能力尺度として用いる。

仲間入り場面での対人交渉能力についての因子分析については，固有値の減退状態などから，３因子を仮定することができた。バリマックス回転後の因子構造を Table 1-2 に示す。累積寄与率は37.8%

であった。

第１因子は，“入れなかったら，自分も相手も嫌な気持ちになるから入れる”“仲間はずれにしたらいけないので入れる”などの項目からなり，「思いやり受諾」因子とした。第２因子は，“自分が嫌いな子なら入れない”“遊びがつまらなくなりそうなら，入れない”などの項目とし，「条件付受諾・拒否」因子とされた。第３因子は，“遊びに入れない理由を相手が傷つかないように優しく説明する”“断るときは，相手の気持ちも考え，入れない理由を相手に分かりやすく伝える”などの項目からなる「説明をともなった拒否」因子とした。また，α係数を算出したところ，第１因子，第２因子，第３因子，順に，α＝0.79，0.70，0.68であった。これを本研究では，仲間入り場面においての対人交渉能力としてみなし，対人交渉能力尺度として用いる。

さらに，基本的遊び能力と対人交渉能力との関連を検討するため，基本的遊び能力の尺度の各下位尺度項目得点と対人交渉能力の尺度の各下位尺度項目得点との相関関係を求めた。

対人交渉能力第１因子「思いやり受諾」と基本的遊び能力との関係では，基本的遊び能力すべての因子との間に有意な相関関係が見られ，第２因子「条件付受諾・拒否」では，基本的遊び能力第１因子「気遣い・公平」においてのみ有意な正の相関関係が見られたが，第３因子「説明をともなった拒

Table 1-3　基本的遊び能力の因子項目得点と対人交渉能力の因子項目得点との相関関係

		基本的遊び能力		
		第１因子 気遣い・公平	第２因子 創造性	第３因子 自己表出
対人交渉能力	思いやり受諾	.581**	.307**	.280**
	条件付受諾・拒否	.199**	.000	-.014
	説明をともなった拒否	.463**	.352**	.352**

**p<.01,*p<.05

Table 2　自立性に関する因子分析結果

No	項目内容	基本的生活習慣の確立	趣味への熱意	対人関係への積極性	共通性
7	勉強の予習や復習を自分からする。	.677	.174	.039	.439
18	授業に真剣に取り組む。	.672	.106	.166	.412
22	当番を自分からきちんとやる。	.537	.128	.251	.350
2	進んで宿題をやる。	.524	.128	.133	.306
11	自分の学校や教室の環境を進んで整える。	.519	.243	.253	.378
23	授業で学んだことをさらに知りたいと自分でもっと調べる。	.483	.274	.136	.382
1	係や委員会などの役割を自分で責任を持ってやる。	.456	.159	.258	.343
3	家族のために自分ができることを進んでする。	.453	.307	.209	.332
25	自分から病気やけがのないように気をつける。	.427	.132	.186	.245
8	自分の身の回りは自分で整理整頓する。	.417	.169	.125	.250
13	自分から早寝早起きする。	.402	.193	.027	.204
14	やりたいと思ったことは進んで挑戦する。	.193	.690	.270	.507
9	自分の熱中できることや物を見つけ，上手にできるように努力する。	.250	.659	.192	.480
20	目標を持って，自分のしたいことをする。	.309	.654	.217	.514
26	自分が好きなことに活発に取り組む。	.189	.629	.224	.447
4	自分の興味や関心のあることを自分から一生懸命取り組む。	.243	.626	.215	.466
16	友達のことを知るために自分から友達に話しかける。	.170	.228	.717	.464
27	たくさんの友達を作るためにいろいろな人に自分から声をかける。	.175	.309	.702	.533
5	よりよい関係を作るため，自分から友達に接していく。	.234	.315	.577	.466
17	困っている人がいたら，自分から声をかけ，助ける。	.360	.193	.525	.397
	因子寄与	7.949	1.180	.780	
	因子寄与率（累積寄与率）	32.7	5.9(38.6)	3.9(42.5)	
	α係数	.832	.817	.848	

否」では，基本的遊び能力すべての因子との間に有意な正の相関関係が見られた。

このように，基本的遊び能力と対人交渉能力との間には，因子間に多くの相関関係が見られ，子どもの遊び能力はこの２つの観点から捉えられると考えられる（Table 1-3 参照）。

一方，自立性についての因子分析は固有値の減退状態などから，３因子を仮定することができた。因子負荷量が.30以下の項目，複数の因子に因子負荷量が高い項目を削除した後，残りの項目について，再度因子分析を行った。バリマックス回転後の因子構造を Table 2 に示す。累積寄与率は42.5％であった。

第１因子は“授業に真剣に取り組む”“家族のために自分ができることを進んでする”などの項目からなり，「基本的生活習慣の確立」因子とした。第２因子は”やりたいと思ったことは進んで挑戦する”“自分の熱中できることや物を見つけ，上手にできるように努力する”などの項目からなり，「趣味への熱意」因子とした。第３因子は“友達のことを知るために自分から友達に話しかける”“たくさんの友達を作るためにいろいろな人に自分から声をかける”などの項目からなり，「対人関係への積極性」因子とした。α係数を算出したところ，第１因子，第２因子，第３因子，順に，α=0.83，0.82，0.85であった。

Ⅲ．遊び能力と自立性との関連について（研究３）

１．遊び能力が自立性に及ぼす影響について（研究 3-1）

目的

ここでは，研究２で作成された尺度を用い，遊び能力が自立性に及ぼす影響について検討を行う。

方法

１. 対象者及び 2. 調査時期：研究２と同様

３. 調査内容：研究２で作成された遊び能力尺度（基本的遊び能力尺度・対人交渉能力尺度）及び自立性尺度を用いて検討する。

４. 分析手続き：遊び能力と自立性との関連を検討するため，基本的遊び能力の尺度及び，対人交渉能力尺度の各下位尺度項目得点と自立性尺度の各下位尺度項目得点との相関関係を求めた。次に，遊び能力が自立性に及ぼす影響について検討するため，重回帰分析を行った。

結果

自立性と遊び能力との関係についての検討を行った。遊び能力，つまり，基本的遊び能力の尺度の各因子および，対人交渉能力の尺度の各因子と自立性尺度の各因子との間に有意な相関関係が多く見られた（Table 3-1 参照）。そこで，遊び能力が自立性に及ぼす影響をより具体的に検討するために，自立性の各尺度の各因子項目得点を基準変数とし，遊び能力を説明変数とする重回帰分析を行った。自立性に及ぼす遊び能力の影響についての重回帰分析結果を図 3-1 に示す。

(1)　自立性第１因子「基本的生活習慣の確立」に及ぼす遊び能力の影響

まず，基本的遊び能力においては，第１因子「気遣い・公平」及び第２因子「創造性」においてのみ有意な正の影響が見られ，順に，偏回帰係数（β）=.403(t(626)=9.17，p<.001，両側検定)，偏回帰係数（β）=.148(t(626)=3.51，p<.001，両側検定)であった。次に，対人交渉能力においては，第１因子「思いやり受諾」においてのみ，有意な正の影響が見られ，偏回帰係数（β）=.171(t(626)=4.31，p<.001，両側検定)であった。したがって，自立性第１因子に及ぼす影響は遊び能力の基本的遊び能力第１因子，第２因子，及び対人交渉能力第１因子において有意な正の影響が示された。

尚，このときの回帰式全体の説明率はR^2=.41であり，有意であった（F(6,626)=73.80,p<.001)。

(2)　自立性第２因子「趣味への熱意」に及ぼす遊び能力の影響

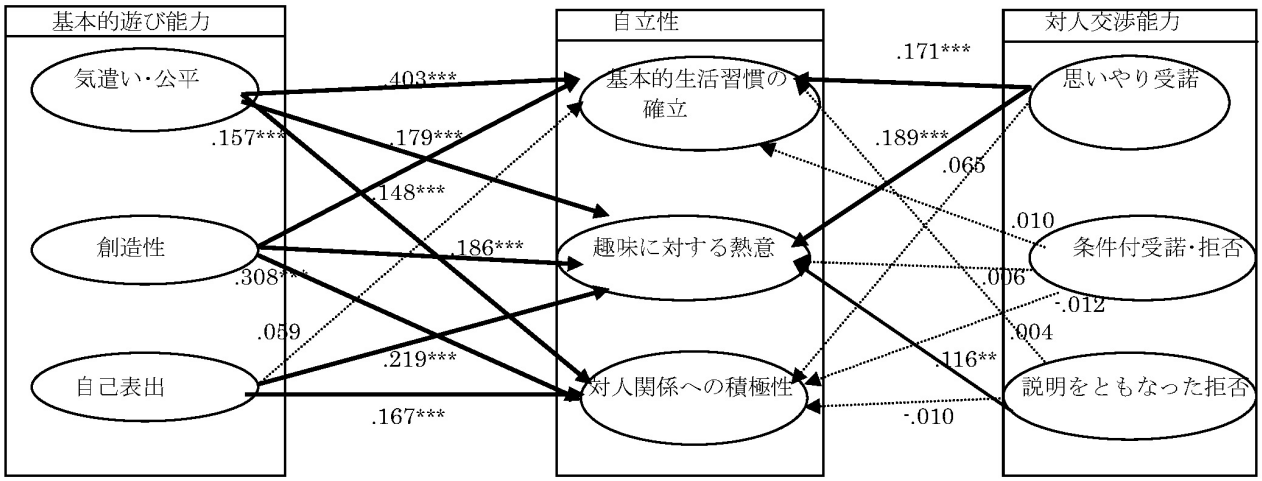
まず，基本的遊び能力についてみると，第１因子「気遣い・公平」，第２因子「創造性」，第３因子「自己表出」全てにおいて有意な正の影響が見られ，順に，偏回帰係数（β）=.179(t(645)=4.23，p<.001，両側検定)，偏回帰係数（β）=.186(t(645)=4.59，p<.001，両側検定)，偏回帰係数（β）=.219(t(645)=5.31，p<.001，両側検定)であった。

次に，対人交渉能力については，第１因子「思いやり受諾」，第３因子「説明をともなった拒否」においてのみ有意な正の影響が見られ，順に，偏回帰係数（β）=.189(t(645)=4.94，p<.001，両側検

Table 3-1　自立性尺度の因子項目得点と遊び能力の因子項目得点との相関関係

		基本的遊び能力			対人交渉能力		
		第１因子	第２因子	第３因子	第１因子	第２因子	第３因子
		気遣い・公平	創造性	自己表出	思いやり受諾	条件付受諾・拒否	説明をともなった拒否
自立性	基本的生活習慣の確立	.608**	.433**	.412**	.467**	.146**	.348**
	趣味に対する熱意	.536**	.525**	.534**	.469**	.084*	.436**
	対人関係への積極性	.429**	.512**	.472**	.300**	.042	.286**

**p<.01,*p<.05



注）数値は標準偏回帰係数（β）を表す。***p<.001, **p<.01

図 3-1「遊び能力→自立性」の重回帰分析の結果

定），偏回帰係数（β）＝.116（t(645)=3.28，p<.01，両側検定）であった。したがって，自立性第２因子に及ぼす影響は，対人交渉能力第２因子を除く，すべての遊び能力において有意な正の影響が示された。尚，このときの回帰式全体の説明率はR^2＝.44であり，有意であった（F(6,645)=84.68,p<.001）。

(3)　自立性第３因子「対人関係への積極性」に及ぼす遊び能力の影響

まず，基本的遊び能力において，第１因子「気遣い・公平」第２因子「創造性」第３因子「自己表出」の全てにおいて有意な正の影響が見られ，順に，偏回帰係数（β）＝.157（t(640)=3.35，p<.001，両側検定），偏回帰係数（β）＝.308（t(640)=6.87，p<.001，両側検定），偏回帰係数（β）＝.167（t(640)=3.65，p<.001，両側検定）であった。次に，対人交渉能力においては，自立性のどの因子にも有意な影響は見られなかった。したがって，自立性第３因子に及ぼす影響は基本的遊び能力においてのみ有意な結果が得られた。

尚，このときの回帰式全体の説明率はR^2＝.31であり，有意であった（F(6,640)=49.34,p<.001）。

考察

まず，基本的遊び能力が自立性に及ぼす影響についてみると，基本的遊び能力の３つの因子「気遣い・公平」，「創造性」，「自己表出」の全てが自立性の「趣味への熱意」「対人関係への積極性」に正の影響を及ぼすことが示された。これについては，まわりに対する思いやりや人間関係を大切にしながら遊ぶこと，さらに，よりよい関係を築くため，自分の思いを相手に表現できることは，趣味や好きなことに積極的に取り組んでいくことにつながると推察される。また，本研究においての基本的遊び能力の項目内容は，友達と楽しく，仲良く遊ぶことを示しているものであり，このような能力はまわりの人とよりよい関係を築き，積極的に行動し，仲間との関係を自ら形成していこうとすることに影響を与えるものと解釈される。

さらに，基本的遊び能力の「気遣い・公平」，「創造性」が自立性の「基本的生活習慣の確立」に正の影響を及ぼすことが示された。これについては，「気遣い・公平」の“ルールをしっかり守って公平に遊ぶ”や“自分の都合に合わせず，友達に何をや

りたいか聞く”の項目で示されているように，公平性を保って遊ぶことにより自分をコントロールする力が養われると推察される。このような遊び場で身につけられた能力は学習場面を含めた基本的生活習慣をコントロールしやすくするなど，自立的な行動形成につながりやすくするのではないだろうか。また，「創造性」の“遊んでいるとき，自分たちが楽しめるようにルールを作りかえる”や“友達を笑わせたり，自分から遊びを盛り上げる”の項目内容から自ら進んで遊びの新しいルールを工夫することや友達を笑わせたり，自分から遊びを楽しくしようと考えたりすることも子どもの基本的生活習慣の形成への影響が示され，子どもが楽しく遊ぶことを自ら考えられる環境への配慮は子どもの自立性の育成に重要なものであると考えられる。

次に，対人交渉能力と自立性との関連については，対人交渉能力の「思いやり受諾」が自立性の「基本的生活習慣の確立」，「趣味への熱意」に正の影響を，「説明をともなった拒否」は「趣味への熱意」に正の影響を及ぼすことが示された。これについては，遊びの途中に他の仲間から「入れて」という予想外の提案を受けた場合，相手を思いやった受諾や拒否ができたりする柔軟性に富んだ対人交渉ができることは，自分の生活習慣や趣味を積極的にしようとする態度や行動につながると推察される。

このように，遊び能力が自立性に影響を及ぼすことが示された。このような結果から，以下では遊び能力の各側面の程度による自立性にはどのような差があるのかについて検討する。

2．遊び能力と自立性との関連について（研究3-2）

目的

研究 3-2 では，遊び能力及び性が自立性にどのように関連しているかをより具体的に調べる。その際，遊び能力に関しては次のような群分けを行ない，検討を行なった。

研究 3-1 より，対人交渉能力の第 2 因子「条件付受諾・拒否」は自立性に及ぼす影響において，有意ではなかったが，弱い負の影響が示されていることから（図 3-1 参照），負の能力と捉える。よって，対人交渉能力においては，第 2 因子を中心に群分けを行なった。すなわち，遊び能力について基本的遊び能力及び対人交渉能力のそれぞれの尺度の因子の項目得点の平均値を用い，対人交渉能力の第 2 因子においてのみ平均得点より低く，各尺度すべての因子項目得点がその平均得点より高い場合を「遊び能力高群」，基本的遊び能力が平均得点より高く，対人交渉能力の第 1,3 因子が平均得点以下であり，第 2 因子が平均得点より高い場合を「基本的遊び能力高群」，対人交渉能力の第 2 因子のみにおいて平均得点より高く，各尺度のすべての因子項目得点がその平均得点以下の場合を「遊び能力低群」，基本的遊び能力が平均得点以下であり，対人交渉能力の第1,3因子が平均得点より高く，第 2 因子が平均点以下の場合を「対人交渉能力高群」とした（Table 3-2 参照）。

方法

1．対象者及び 2．調査時期：研究 2 と同様

3．調査内容：研究 2 で作成された遊び能力尺度及び自立性尺度を用いる。

結果

遊び能力による自立性の差を検討するため，遊び能力群及び性を独立変数とし，自立性の 3 因子それぞれを従属変数とする分散分析を行った。

分散分析の結果が有意であった場合，下位検定と

Table 3-2　基本的遊び能力・対人交渉能力の各因子項目得点による群分けの基準値

基本的遊び能力		遊び能力高群	基本的遊び能力高群	遊び能力低群	対人交渉能力高群
		全ての因子項目得点が平均より高く	全ての因子項目得点が平均より高く	全ての因子項目得点が平均以下	全ての因子項目得点が平均以下
基本的遊び能力	気遣い・公平	31.7911～	31.7911～	～31.7910	～31.7910
	創造性	16.8009～	16.8009～	～16.8008	～16.8008
	自己表出	14.4612～	14.4612～	～14.4611	～14.4611
対人交渉能力		第 1,3 因子の項目得点が平均より高く 第 2 因子項目得点が平均以下	第 1,3 因子の項目得点が平均以下 第 2 因子項目得点が平均より高い	第 1,3 因子の項目得点が平均以下 第 2 因子項目得点が平均より高い	第 2 因子項目得点が平均以下 第 1,3 因子の項目得点が平均より高い
対人交渉能力	思いやり受諾	18.9844～	～18.9843	～18.9843	18.9844～
	条件付受諾・拒否	～17.2424	17.2425～	17.2425～	～17.2424
	説明をともなった拒否	18.1822～	～18.1821	～18.1821	18.1822～

Table 3-3　遊び能力の群及び性による自立性尺度項目得点の平均とＳＤ及び分散分析の結果

		性別	M(SD)	N	主効果	交互作用	下位検定
第１因子 基本的生活習慣の確立	HH[1)]	男	41.77(8.01)	3	F(2,111)=45.56**	ns	LL, HL<HH
		女	45.39(5.68)	31			LL<HL
	HL[2)]	男	40.80(7.92)	5			
		女	39.00(4.12)	7			
	LL[3)]	男	31.81(6.36)	43			
		女	30.81(8.36)	16			
第２因子 趣味への熱意	HH	男	18.14(1.96)	14	F(2,111)=62.20***	ns	LL, HL<HH
		女	17.52(2.43)	31			LL<HL
	HL	男	14.67(0.82)	6			
		女	16.57(1.90)	7			
	LL	男	10.80(3.45)	45			
		女	11.71(3.55)	17			
第３因子 対人関係への積極性	HH	男	23.14(2.25)	14	F(2,111)=29.50***	ns	LL, HL<HH
		女	23.10(2.44)	30			
	HL	男	21.50(2.26)	6			
		女	21.43(3.87)	7			
	LL	男	17.47(4.41)	45			
		女	15.38(6.11)	16			

***p<.001, **p<.01
注）1)：遊び能力高群，2)：基本的遊び能力高群，3)：遊び能力低群

して，LSD法による多重比較を行った。分散分析の結果についてはTable 3-3に示す。尚，「対人交渉能力高群」においては，群内のケースが少なかったため，除外し，分析を行った。

まず，遊び能力による自立性第１因子の「基本的生活習慣の確立」及び第２因子の「趣味への熱意」の差については，いずれにおいても，遊び能力の群の主効果のみ見られ（順に，F(2，111)=45.56，p<.01；F(3，99)=26.54，p<.01），遊び能力高群，基本的遊び能力高群，遊び能力低群の順に高いことが示された。

次に，自立性第３因子の「対人関係への積極性」との関連では，遊び能力の群の主効果のみ見られ(F(3,99)=28.40，p<.01)，遊び能力高群及び基本的遊び能力高群が遊び能力低群より高いことが示された。

考察

ここでは，遊び能力の程度により，自立性にどのような差があるのかについて検討を行なった。主な結果についての考察を行なう。

すべての自立性因子において，遊び能力低群はほかの群より低く，遊び能力高群が他の群より高いことが示された。すなわち，基本的遊び能力及び対人交渉能力の両方の高い場合は，自分から物事を進んで行なうという，自立への態度や行動力が高いことが示された。友達と仲良く楽しく遊び，仲間入り場面でもその場で適切な対応ができることは，友達や自分が遊びをより楽しむため，積極的に行動していくことと予想され，遊び場面でのこのような態度や行動は自分の身のまわりをはじめ趣味活動及び対人関係などにおいて自立的な行動ができると推察される。

さらに，自立性第３因子を除く他の２つの因子において，基本的遊び能力高群が遊び能力低群より高いことが示された。友達と仲良く遊び，遊びをよりよくするためいろいろな工夫をし，自分の考えや思いを相手に伝えることは，遊びを楽しくするにはどうしたらよいのかについて自分自身で考え，実践するため，自立への行動や態度が身につきやすいのではないだろうか。加えて，第3因子の「対人関係への積極性」の場合，遊び能力低群は他の群より低かった。すなわち，基本的遊び能力及び対人交渉能力のいずれも低い場合，対人関係への積極性が示されにくいことが示唆された。ところが，対人関係への積極性において基本的遊び能力高群は遊び能力高群との間に差は見られなかった。

このようなことから，子どもが仲間関係を積極的に営んでいくためには対人交渉能力はもちろんのこ

と，基本的遊び能力を育んでいくことがより重要であるかもしれない。これについては，今後詳しい検討が望まれる。

尚，本研究においては性別による差は見出されなかったが，これに関してはより多くの子どもを対象に再検討を行なったうえで，性差の確認をすべきであろう。

全体考察

1．遊び能力及び自立性の因子分析結果について

本研究では，遊び能力を基本的遊び能力と対人交渉能力の２つの側面から捉え，それぞれについての尺度を作成し，検討を行なった。

まず，基本的遊び能力は，「気遣い・公平」，「創造性」，「自己表出」の３因子構造であることが示された。遊びを楽しくし，友達と仲良く遊ぶためには，周りのことを考え，行動し，自分の思いや考えを相手に伝え，アイディアや創造性が豊かであることが大切であると考えられる。

また，仲間入り場面での対人交渉能力は，「思いやり受諾」，「条件付受諾・拒否」，「説明をともなった拒否」の３因子構造であった。対人交渉能力においては，相手のことを考え，受け入れること，受け入れるか否かを決めること，相手の仲間入りを断る場合においても自分の都合や気持ちに偏らず，相手の気持ちを考え，その理由などをきちんと伝えることが重要なポイントとなってくることが示された。

全体的にみると基本的遊び能力と対人交渉能力との間には，相関関係が多く見られたので，これら基本的遊び能力と共に対人交渉能力は遊び能力の下位能力と捉えられ，子どもの遊び能力にはこの２つの観点から捉えられるのではないかと思われる。

自立性については，「基本的生活習慣の確立」，「趣味への熱意」，「対人関係への積極性」の３因子構造であった。このようなことから，子どもの自立性には，日常生活を自分から営んでいくこと及び好きなことややりたいことに進んで取り組むこと，友達とよりよい関係を築こうとする態度及びその行動が含まれることが示された。

2．遊び能力と自立性との関連について

遊び能力は自立性に強い影響を及ぼすことが明らかとなった。

その遊び能力の基本的遊び能力及び，対人交渉能力による自立性の差について検討を行なったが，基本的遊び能力と対人交渉能力のいずれも高いほうが自立性への行動をよりよく示す結果が得られた。本研究の因子項目内容から示されたように，基本的遊び能力の因子項目内容は遊びを楽しく，友達と仲良く遊ぶために自分から相手に働きかける行動が多かったが，このような能力は自立性を示す行動を促していくことにつながるのではないかと推察される。

また，対人交渉能力は，相手の気持ちや遊びの状況等を考え，友達への対処を自ら行うことであり，それは自立的な行動につながると考えられる。自立性全ての因子において，遊び能力低群は遊び能力高群及び基本的遊び能力高群より低く，遊び能力高群が基本的遊び能力高群及び遊び能力低群より高かったことより，遊び能力と自立性との関連が明らかとなった。友達と仲良く楽しく遊び，相手の気持ちを考え，適切な対応ができることは，友達を思いやりながら，自ら考え，判断することであり，このようなことは子どもの生活においてより自立的に，かつ積極的に関わっていく上で多くの影響を与えるものと推察される。

今後の課題

本研究では，質問紙による検討を行なったが，特に，対人交渉能力については実際の仲間場面を用い，調べることにより子どもの仲間との交渉能力に関する具体的な結果が見出されるであろう。さらに，対人交渉能力の「条件付受諾・拒否」は，基本的遊び能力との間に有意ではなかったが，弱い負の相関関係にあり，自立性においても有意ではなかったが，弱い負の影響を及ぼしていた。これについては，子どものこのような対人交渉の仕方が遊び能力にどのような影響を及ぼすかについてさらなる検討が必要であろう。また，遊び能力及び自立性の尺度の作成においては，信頼性の検討のみ行っており，妥当性については検討されていない。それゆえ，妥当性の検討を行なった上で遊び能力と自立性との関連について検討することが求められる。

これらのことを解決することが，今後の課題である。

引用文献

C. カミイ ＆ R.デブリーズ 1984 集団遊び～集団ゲームの実践と理論～ 北大路書房

George G. Bear & Maureen A. Manning 2005 子

どものしつけと自律　風間書房
長谷川　雅康・豊留　由美 2005 子どもの遊びの変化とその意欲への影響に関する研究　鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要第15巻　181-195
長谷川　祐子 2005 昔ながらの子どもの遊びの意義～現代の子どもの遊びと比較して～　教育学科研究年報第31号　18
Hmel, B. A. & Pincus, A.L. 2002 The meaning of autonomy: On and beyond the interpersonal circumplex. Journal of Personality, 70, 277-310
本田　恵子 2000 子どもの自律を支えるコミュニケーション　全人教育　第74巻　第８号　17-25
柿沼　儀子・芳野　紀子 1986 乳幼児の遊びの発達に関する調査研究(1)～遊びの種類について～　日本保育学会大会論文抄録39号　142-143
金子　智栄子・横田　まどか 1999 児童期の遊びと青年期の対人態度との関連～児童期の遊びの種類と大学生の共感性，他者への愛着，対人志向性について～ 日本教育心理学会発表論文集　第41号　349
Kathy Hirsh-Pasek & Roberta Michnick Golinkoff & Diane Eyer 菅　靖彦(訳) 2006 子どもの「遊び」は魔法の授業　株式会社アスペクト
宮川　洋子・山口　茂喜 1994 集団遊びの指導法に関する研究　日本保育学会　854-855
森　楙・植田　ひとみ・福井　敏雄 1982 幼児の遊び能力形成要因の多重量解析　教育社会学研究第37集　96-105
森　楙・植田　ひとみ・福井　敏雄・西田　忠男 1984 子どもの遊び能力と学校生活(Ⅰ)～その位置づけと役割～　日本教育社会学会大会発表要旨抄録　第36号　104-107
森　楙・植田　ひとみ・福井　敏雄・西田　忠男 1985 子どもの遊び能力と学校生活(Ⅱ)～遊び能力と学力・生活態度との関連を中心に～　日本教育社会学会大会発表要旨抄録　第37号　64-67
小野　智美 2004 子どもの自律性(Autonomy)の概念分析 日本看護科学会誌 第23巻 第４号 71-79
大山　正・藤永　保・吉田　正昭 1978 心理学小辞典　有斐閣
横山　卓 2004 子どもの遊びと友人観～小学生の場合～ 共栄学園短期大学研究紀要第20号 139-151

謝辞

本研究を実施するに当たり，質問実施に快くご了承くださいました小学校の先生方より，多大なるご協力をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。また，被験者としてご協力をいただきました児童の皆様に心から感謝申し上げます。

（2007年５月21日受付）
（2007年７月４日受理）